

四街道市出口・鐘塚(2)・(3)・(4)遺跡

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XIII —

平成27年10月

独立行政法人 都市再生機構

公益財團法人 千葉県教育振興財團

よつ かい どう し で ぐち かね づか

四街道市出口・鐘塚(2)・(3)・(4)遺跡

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XVIII —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第743集として、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市出口・鐘塚遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、後期旧石器時代の遺物集中地点が7か所発見されました。そこからは、全国的に見ても発見例の少ない有溝砥石が出土し、当地方における旧石器時代の様相を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際して御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成27年10月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 堀田弘文

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県四街道市長岡字鐘塚 209-1 ほかに所在する出口・鐘塚（2）・（3）・（4）遺跡（遺跡コード 228-009（2）、同（3）、同（4））である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財團法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、上席文化財主事田村 隆が担当した。
- 6 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/25,000 地形図（佐倉）(NI-54-19-14-2)

第4図 独立行政法人都市再生機構による物井地区現況図

- 7 本書で使用した図面の方針は全て座標北である。測量値については日本測地系を使用した。
- 8 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の機関の御指導・御協力を得た。

千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、四街道市教育委員会

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯と概要.....	1
2 調査の方法.....	1
3 標準土層.....	3
第2節 遺跡の位置と環境.....	4
第2章 後期旧石器時代.....	5
第1節 はじめに.....	5
第2節 各集中の状況と出土遺物.....	7
1 集中1.....	7
2 集中2.....	12
3 集中3.....	13
4 集中4.....	15
5 集中5.....	15
6 集中6.....	20
7 集中7.....	23
第3章 縄文時代の遺構と出土遺物.....	24
1 SK-001	24
2 縄文時代の遺物.....	24
第4章 まとめ.....	26

表目次

第1表 集中1石器属性表.....	9	第5表 集中5石器属性表.....	18
第2表 集中2石器属性表.....	12	第6表 集中6石器属性表.....	22
第3表 集中3石器属性表.....	14	第7表 集中7石器属性表.....	23
第4表 集中4石器属性表.....	15		

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の地形	2	第11図 集中4遺物分布図	15
第2図 標準土層	3	第12図 集中5遺物分布図	16
第3図 出口・鐘塚(2)・(3)・(4)遺跡 全体図	6	第13図 集中5の遺物(1)	17
第4図 出口・鐘塚遺跡調査範囲	8	第14図 集中5の遺物(2)	18
第5図 集中1遺物分布図	9	第15図 集中6遺物分布図	19
第6図 集中1の遺物(1)	10	第16図 集中6の遺物	21
第7図 集中1の遺物(2)	11	第17図 集中7遺物分布図	22
第8図 集中2遺物分布図	12	第18図 集中7の遺物	23
第9図 集中2・集中3・集中4の遺物	13	第19図 縄文時代の遺構と縄文土器	24
第10図 集中3遺物分布状況	14	第20図 縄文時代遺物包含層出土石器	25
		第21図 剥片製小型石器の系統	28

図版目次

図版1 集中1遺物出土状況、集中1有溝砥石出土状況(1)、集中1有溝砥石出土状況(2)、集中2遺物出土状況、集中3・集中5遺物出土状況、集中6遺物出土状況、SK-001	図版3 後期旧石器時代集中5、後期旧石器時代集中6、後期旧石器時代集中7出土遺物、縄文時代遺物包含層出土遺物
図版2 後期旧石器時代集中1、後期旧石器時代集中2、後期旧石器時代集中3、後期旧石器時代集中4、後期旧石器時代集中5出土遺物	図版4 後期旧石器時代集中1有溝砥石、縄文土器

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と概要

独立行政法人都市再生機構は、宅地の安定的な供給を目指し、JR 総武本線物井駅と、既存の千代田団地との間に広がる広大な地域を対象として、物井地区土地区画整理事業を実施している。その面積は宅地、公園・緑地など 95.7 ヘクタールに及ぶ。区画整理事業地内には多くの埋蔵文化財包蔵地があるため、昭和 59 年以降、公益財團法人千葉県文化財センターが逐次発掘調査を実施してきた。

今回報告する出口・鐘塚遺跡の発掘調査及び整理作業の担当職員は以下のとおりである。

平成 20 年度（出口・鐘塚（2）遺跡）

期間 平成 21 年 2 月 2 日～平成 21 年 2 月 13 日

組織 調査研究部長 大原正義、北部調査事務所長 農田佳伸、上席研究員 土屋調一郎

内容 確認調査 211m²

平成 21 年度（出口・鐘塚（3）遺跡）

期間 平成 21 年 5 月 21 日～平成 21 年 6 月 30 日

組織 調査研究部長 及川淳一、北部調査事務所長 野口行雄、上席研究員 土屋調一郎

内容 確認調査 1,274m²、本調査 下層 77m²

平成 22 年度（出口・鐘塚（4）遺跡）

期間 平成 22 年 8 月 2 日～平成 22 年 8 月 30 日

組織 調査研究部長 及川淳一、北部調査事務所長 野口行雄、上席研究員 田井知二

内容 確認 566m²、本調査 上層 40m²、下層 89m²

平成 24 年度

期間 平成 24 年 12 月 1 日～平成 24 年 12 月 28 日

組織 調査研究部長 関口達彦、整理課長 高田 博、上席文化財主事 小高春雄

内容 水洗・注記～接合の一部

平成 26 年度

期間 平成 26 年 12 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日

組織 調査研究部長 伊藤智樹、整理課長 今泉 潔、上席文化財主事 田村 隆

内容 接合の一部～原稿執筆・編集

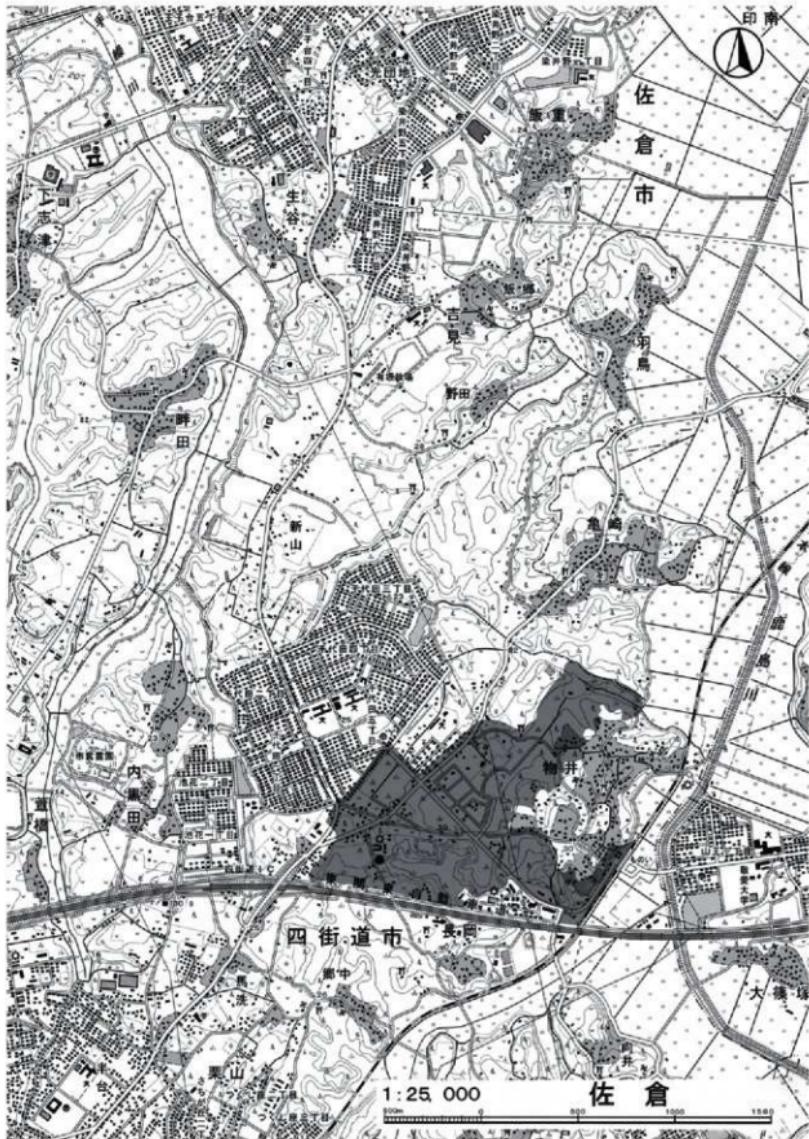
平成 27 年度

期間 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

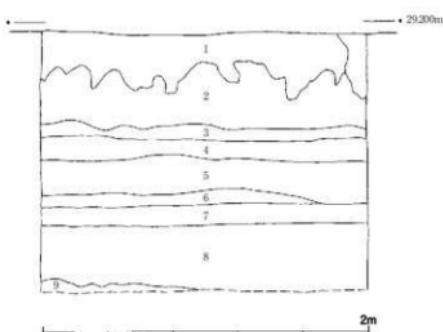
内容 報告書刊行

2 調査の方法

調査に当たっては、公共座標に準拠した 50m 方眼を基本とするグリッド・システムを採用した。一辺 50m の単位区画は、南北方向のアルファベット行と東西方向の数字列を組み合わせることによって識別



第1図 遺跡の位置（黒丸）と周辺の地形（網は物井地区範囲）



第2図 標準土層

されるが、今回報告するエリアは、T行8列及び9列、U行8列及び9列によってほぼ覆われる（第3図）。これは物井地区全域の基本方眼網である。基本グリッドの内部は、一辺5mの小グリッドによって100分割される。小グリッドの呼称は、大グリッド西北コーナーを起点00とし、東に01、02、03等と進む。また、南へは10、20、30等と進み、すべての小グリッドに00～99という二桁の番号が割り振られる。小グリッドはこれに基本グリッド名を冠し、例えば、9U-00のように記号化され、調査段階の記録化の基本単位となる。

発掘調査に当たっては、調査地がいずれ

も現道に接する宅地であったため、基本グリッドに沿った上層確認調査トレンチの設定は行わず、敷地の長軸に沿ったやや変則的なトレンチ配置が採用された。下層確認のための試掘坑は、原則としてトレンチ中央に設定したが、一部では現地の条件にあわせ、変則的な設定となっている。確認調査の対象面積比率は上層10%、下層4%を目安とした。

3 標準土層

遺跡の標準土層として、8T-99の土層をあげておく（第2図）。ここでは完新世の土壤層はすでに失われているが、立川ローム層全層を留めていた。

- 1層 軟質の土壤層である。渡辺ら（渡辺ほか 1992）のⅢ層に相当する。
- 2層 スコリア質の硬い土壤層である。1層との境界は波状帶となる。渡辺らのⅣ層からV層に相当するが、非常に薄く、対応関係に苦慮する。
- 3層 始良 Tn 火山灰層を挟む硬質の土壤層である。渡辺らのVI層に相当する。
- 4層 第2黒色帯の上部層である。始良 Tn 火山灰の粒子が混入する。渡辺らのⅦ層に相当する。
- 5層 第2黒色帯中部層で、赤色スコリアなど有色スコリア粒を含む。渡辺らのⅧa層に相当する。
- 6層 第2黒色帯中部層であるが、明るい色調の部分である。渡辺らのⅧb層に相当する。
- 7層 第2黒色帯下部暗色部である。やはりスコリア質である。渡辺らのⅧc層に相当する。
- 8層 立川ローム層最下層である。渡辺らのX層に相当する。渡辺らはこの層を3層に細分しているが、本地点では分層はできなかった。
- 9層 武蔵野ローム層のトップであるが、一部しか掘削されていない。

第2章の記述では、渡辺らの記号を踏襲する。ここでの分層は、隣接する昭和61年度調査区の土層区分と基本的に一致している。ただし、8層の細分に関しては否定的であった。8層を3区分する見解が標準とされているが、必ずしも一般的ではない。

第2節 遺跡の位置と環境

本遺跡の主要部分に関しては昭和61年度に調査され（この調査を出口・鐘塚（1）遺跡と仮称する）、すでに報告書が刊行されている（岡田 1999）。報告書では、遺跡の立地環境についても詳しく記述されているので、概要のみ記しておく。出口・鐘塚遺跡は印旛沼に注ぐ鹿島川と手縫川に挟まれる台地上にある。台地の標高は29m前後ある。遺跡中央部には鹿島川の支谷がほぼ南北に走り、豊富な遺物を出土した出口・鐘塚（1）遺跡第1調査区は、その湧水点を東西に分ける舌状台地上に位置する（第1図・第4図）。

今回報告する3地点（それぞれ出口・鐘塚（2）・（3）・（4）遺跡とする）は、この支谷と、更に東側に入り込む棒山・戸戸遺跡側の支谷とを画する尾根上にある。各地点は何れも小規模であり、出口・鐘塚（2）遺跡の規模が211m²、同（3）が1,274m²、同（4）が566m²である（第3図・第4図）。

これまで出口・鐘塚遺跡からは20か所以上の遺物集中地点から2,807の遺物が回収されている。Ⅹ層中部を中心に多くの集中地点があり、該期の標準資料となっている。遺跡の北側には出口遺跡が接する。出口遺跡には29か所の遺物集中地点があり、967点の遺物が出土している（野口 2013）。これ以外にも物井地区では、御山遺跡（矢本 1994）や小屋ノ内遺跡（古内 2005）など、重要な後期旧石器時代の遺跡が調査されている。

一方、縄文時代以降の遺構、遺物の分布としては、出口・鐘塚（1）遺跡で、縄文時代の陥穴3基、性格不詳の土坑1基、古墳周溝1基、歴史時代の方形周溝遺構6基があり、他に近世の溝、穴、炭窯などが発見されている。出口・鐘塚（1）遺跡では、出口・鐘塚（4）遺跡の北側に接する部分で複数の溝が東西に掘削されていた。溝の底面は硬く踏み固められており、近世の道跡と考えられている。ウマの歯が採集されている。

引用・参考文献

- 岡田誠造 1999 「四街道市出口・鐘塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－」（財）千葉県文化財センター
野口行雄 2013 「四街道市出口遺跡旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XIV－」（公財）千葉県教育振興財團
古内 茂 2005 「四街道市小屋ノ内遺跡（1）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－」（財）千葉県文化財センター
矢本節朗 1994 「四街道市御山遺跡（1）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ第1分冊－」（財）千葉県文化財センター
渡辺修一ほか 1992 「下総台地における立川ローム層の層序区分」『研究速報誌』（財）千葉県文化財センター 3-15頁

第2章 後期旧石器時代

第1節 はじめに

集中地点の記載に先だち、石器と石材の分類基準について触れておく。今回の調査によって出土した石器は、石核、剥片、石刃、有溝砥石の4種であった。その定義は以下の通りである。

1. 石核 剥片生産と密接に関わる石器であるが、剥片は剥片一般なのではなく、ブランクであるという条件が付される。ブランクとは未加工のまま、あるいは細部加工を経て、加工工具や厨房具、あるいは狩猟具として使用される有用剥片をいう。有用剥片は「目的的剥片」という狭い枠組みで理解することもできるが、生産された剥片の中から必要な属性をもった剥片が選択されることも多い。

石核には二種ある。一つは打面を設定し、そこから剥片を剥離する一般的な石核で、これを石核Aとした。もう一つは、いわゆる両極石核である。楔形石器（ピエス・エスキエ）という呼称もある。これを石核Bとした。石核Bについては、剥片生産のための石核か、それとも楔形をした石器かという議論があるが、その機能はつくられたコンテキストに依存している。ある場合には小型剥片用の石核となり、ある場合にはさまざまな機能をもった石器として使われたと考えられる。両者を兼ねる場合も想定される。

2. 剥片 上記石核と対応する。剥片は原縁面の有無、細かな刃こぼれの有無、細部加工の有無などから以下の通り細分する。

剥片A 原縁風化面（酸化フロント）が観察されるもの

剥片B 原縁風化面（酸化フロント）が観察されないもの

剥片C 細かな連続的な刃こぼれの観察されるもの 類似する小剥離は、トランピング（ヒトや動物による踏みつけ）によっても生じるので注意を要する。

剥片D 企図的な連続剥離が確認されるもの 本遺跡の場合、剥離の多くはニブリング（日本語訳はないが、仮に啄打と訳しておく）によるものである。

剥片E 両極剥離による剥片であり、線状打面、打面に接する背面潰状剥離痕、平坦打瘤、密集する腹面のアンジュレーションなどから識別した。

3. 石刃 一般的な定義に従うが、石刃生産の留意点は（田村 2015）で詳説した。

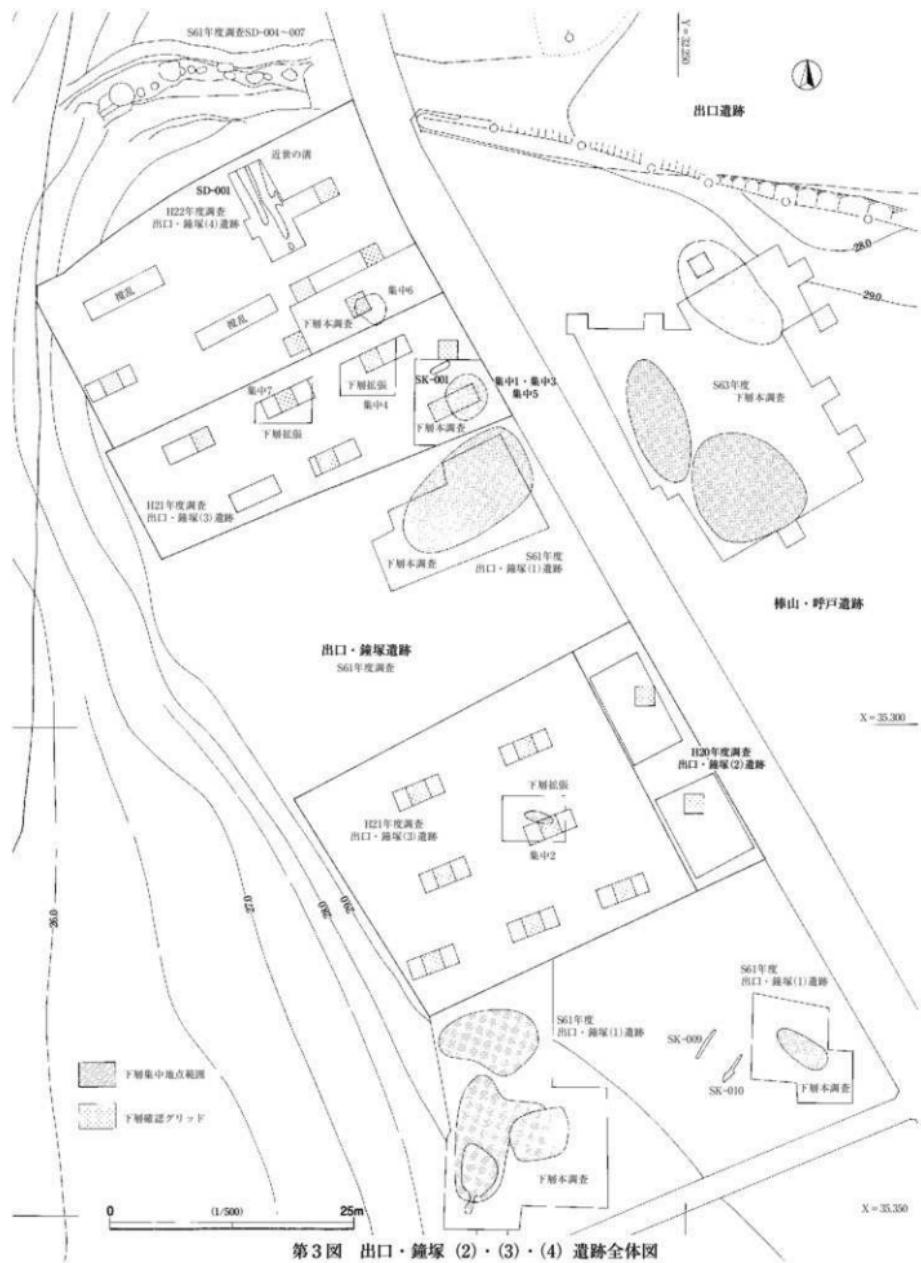
4. 有溝砥石 幅広い溝をもつ砥石であり、第一報では、磨製石斧の刃部研磨用とされた（島立 1994）。

次に石材について分類根拠を示しておく。

1. 珪質頁岩Y 褐色～暗褐色の酸化フロントの発達した細粒緻密な塊状岩で、貝殻状断口が発達する。珪化した黒色頁岩である。これと類似する珪化泥岩・珪質頁岩は関東エリアには産出せず、脊梁山脈をこえた第三紀中新世の地層分布地域に点在している。直近で最も規模が大きい産出地は山形県米沢市南部矢子層であり、ここでは頁岩層が広く珪化し、大規模な珪質頁岩供給源となっている。新潟にも何か所か同種石材の産地はあるが、その産状は、いずれも凝灰岩層中の火碎泥岩である。添字Yは矢子層産を示す。

2. 珪化泥岩T 第三紀中新世の珪化泥岩であり、産出層は高原山基盤岩である。房総半島の万田野・長浜層に扁平な円窪として多く含まれる。添字Tは高原山産を示す。

3. 珪質頁岩H 房総半島保田層産群の珪質頁岩である。灰色をしており、濃色の斑文が認められる。



第3図 出口・鐘塚(2)・(3)・(4)遺跡全体図

印旛沼以南の地域で大量に消費された石材であり、南房総市三原川上流部に岩体が露出する。添字 H は保田層群産を示す。

4. チャート 中生代生物岩である。関東山地と足尾山地、並びに八溝山地に広大な岩体が広がる。房総半島の万田野・長浜層にも多く含まれている。

5. 砂岩 ここでは、一般的な砂岩ではなく、上総層群など房総半島の第三紀～第四紀の地層に含まれる軟質砂岩を指示する。黄褐色をした均質な塊状岩であるが、石英など粒子間の結合はきわめて脆弱で、容易に分離し、粒状となる。石斧刃部の研磨をおこなう場合、分離した硬質の石材構成粒子が研磨剤の役割を果たした可能性がある。しかし、消耗は顕著であることから、数面に及ぶ研磨面がつくられたのであろう。

6. 黒色安山岩 集中 2 にある無斑晶の例は万田野・長浜層産の円盤とみられる。集中 6 の例はこれとは異なり、酸化フロントが未発達の石材で、産地は複数あるが特定できない。

7. ホルンフェルス 万田野層中に多量に含まれる中生代堆積岩起源の変成岩である。

8. 碧玉 産地不詳である。同種碧玉産地は東関東各地に点在する。万田野・長浜層にも少なからず包含されている。

9. 黒曜石 集中 5 の例は、透明で良質な石材である。原産地分析は行っていないが、筑摩高地産であろう。

第 2 節 各集中の状況と出土遺物

1 集中 1

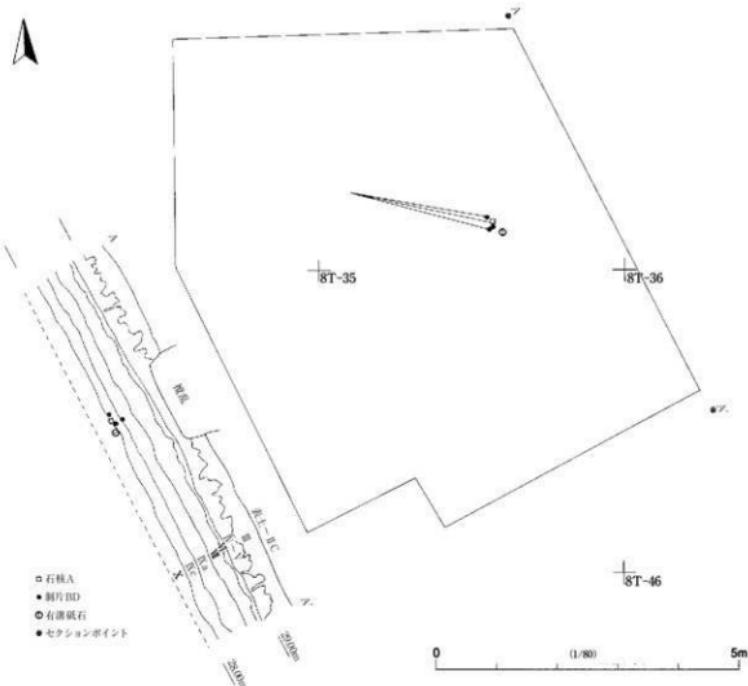
狭い範囲に 6 点の遺物が集中していた。内訳は、剥片 4 点と有溝砥石 2 点 1 個体である。産出層準は IX 層最下部であった。埋没前後の遺物の移動を考慮すれば、一か所にまとめて置かれていたと考えても不自然ではない。

1 は砂岩製の有溝砥石である。本体に小型の剥離片が接合するが、これは埋没後の破損であり、企図的な剝離によるものではない。概略不整五角錐状をしている。長軸に沿って平行する溝が 5 条ある。各溝は緩く湾曲した断面形態をしており、その延長は 100mm 前後ある。側縁の一部には粗い成形剝離痕が残される。成形剝離痕は研磨面を切るので、ある程度研磨が進んだ段階での成形痕とみられる。底面は剥離面で、角柱状に粗削りされたプランクが想定される。断面は不整五角形であるが、一面の幅が広く、この面にも両側縁からの成形痕がある。また、この面には不規則な短線状痕が十数条以上観察され、反対側の面の研磨に伴う使用痕とも考えられる。以上のことから、この石器はもともとかなり大型の砥石であり、研磨作業に伴って再加工され、次第に小型化していった過程が想定される。さらに、横断面から窓われるよう、各溝の曲率には微妙な差があり、研磨対象の状況（幅の広狭と湾曲率）に応じて各面が使い分けられていた可能性もある（永塚 2001）。重量は 0.6kg 程度でそれほど重くはないが、頻繁に持ち歩かれる石器ではない。ほぼ全面に溝が刻まれ、長期間管理されていたことが分かる。

2 は 2a 剥片 BD、2b 剥片 BD、2c 石核 A の接合状況を示す。切り合ひ関係から、厚みのある立方体に近い剥片の尾部から、さらに剥片を剝離していることがわかる。2a + 2b 剥離後に、さらにその剥離面から、小型の剥片が剝離されているが、この剥片は残されていなかった。分厚い剥片のリダクションを示す資料である。



第4図 出口・鍾塚遺跡調査範囲



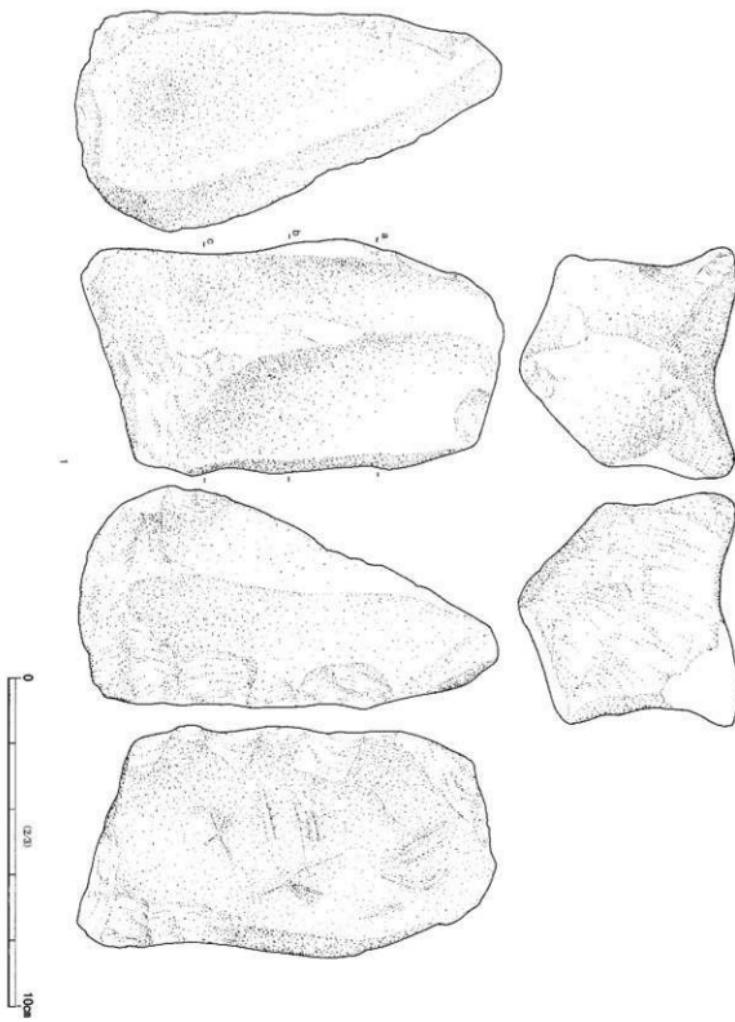
第5図 集中1遺物分布図

3は碧玉の剥片BDである。折れ面にも細部加工が及んでいる。背面の剥離痕から、打面の位置を反転させる工程が窺われる。

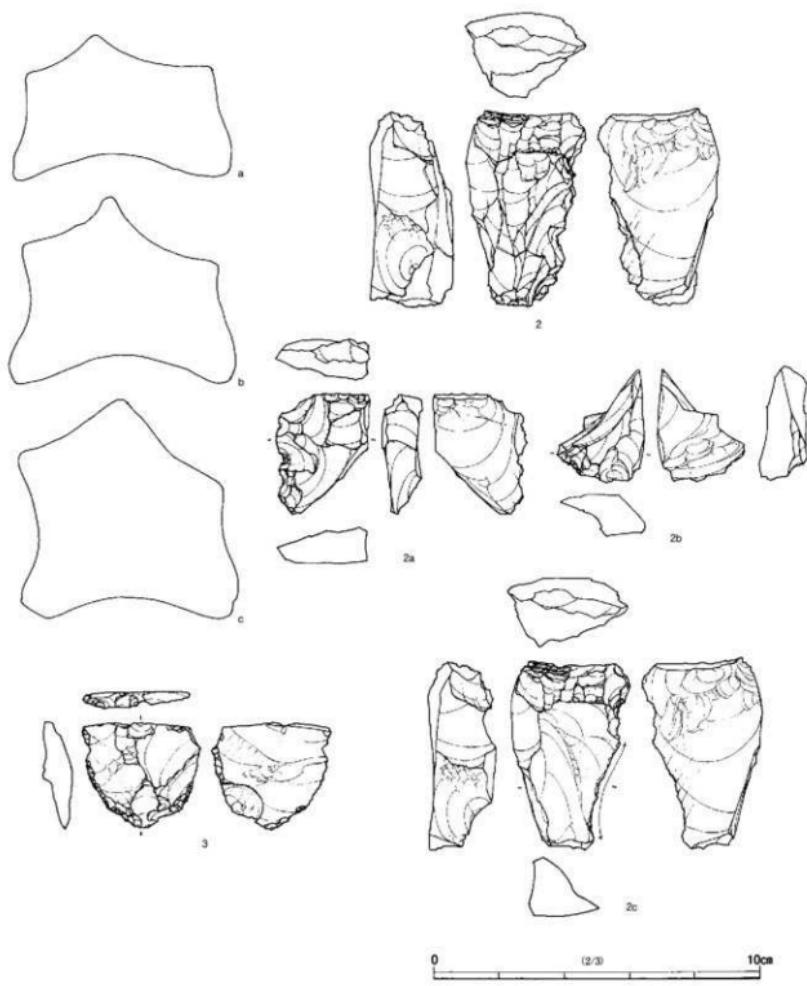
以上のように、本集中は砥石のほか、使用過程におかれた石器類のみが寄せ集められた状況を示している。これはキャッシング（一時的保管場所への収納）を示す指標と考えられる。将来の利用を想定した戦略といえるだろう。近傍に何らかの目印があったことはいうまでもない。

第1表 集中1石器属性表

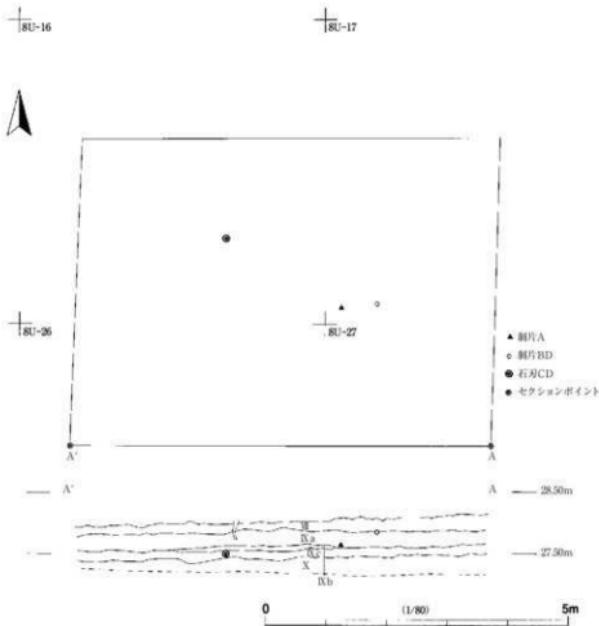
採団番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
3	BT-35	15	剥片 BD	碧玉	32.8	36.0	9.3	7.86
2a	BT-35	16	剥片 BD	珪質頁岩 Y	37.1	28.8	12.1	11.29
2c	BT-35	17	石核 A	珪質頁岩 Y	57.9	37.0	21.3	31.01
2b	BT-35	18	剥片 BD	珪質頁岩 Y	34.5	27.1	13.1	7.80
1	BT-35	19	有溝砥石	砂岩	130.5	74.9	67.8	582.26



第6図 集中1の遺物（1）（断面図は第7図左）



第7図 集中1の遺物（2）



第8図 集中2遺物分布図

2 集中2

狭い範囲から石刃1点、剝片2点が出土した。产出層準はⅧ層の上部～下部であるが、遺物点数が少ないため、時期的な限定は難しい。

1は剝片BDである。打面を残す小型縦長の剝片であるが、背面左側縁にニブリングによる整形がある。さらに先端部には尾端ステップとなる小剥離痕があり、明らかにインパクト・ダメージと判定される。同様の小型剝片製尖頭器は他の集中にも頻出するが、これまでほとんど注目されてこなかった器種である。これにはすでに「端部整形尖頭器」という呼称を与えたが、改めて注意を喚起したい。

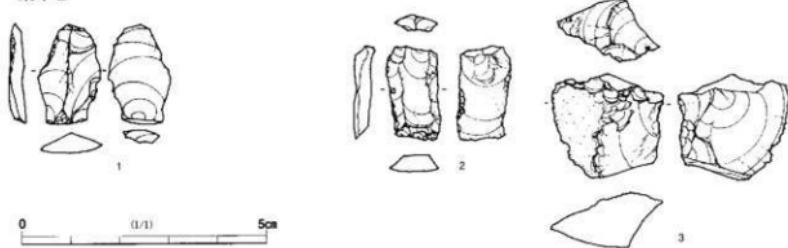
2は石刃CDである。背面尾部の剥離は石刃のトランケーションであり、左側縁にかなり顕著な使用痕が認められる。形態的には「端部整形刃器」に含まれる。

3は剝片Aである。打面と作業面の入れ替えが行われている。

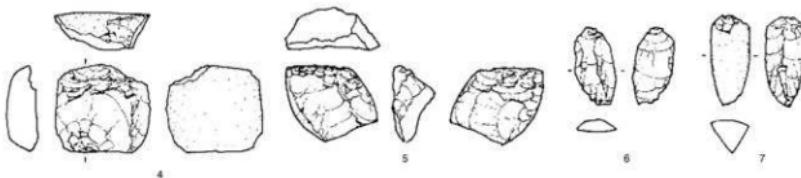
第2表 集中2石器属性表

插図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
2	8U-16	2	石刃 CD	碧玉	28.3	16.4	5.0	2.78
1	8U-17	2	剝片 BD	珪質頁岩 H	20.2	12.9	3.9	0.73
3	8U-17	3	剝片 A	珪質頁岩 H	32.2	34.8	17.1	16.26

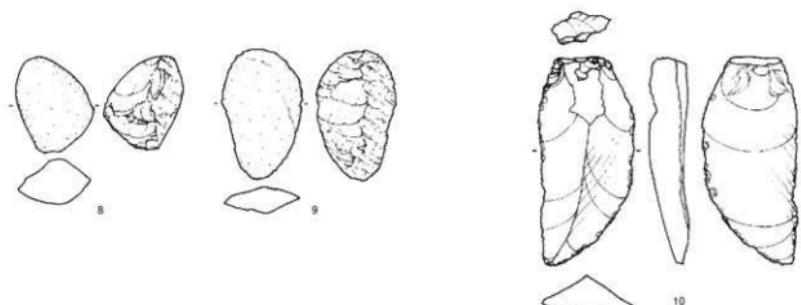
集中2



集中3



集中4

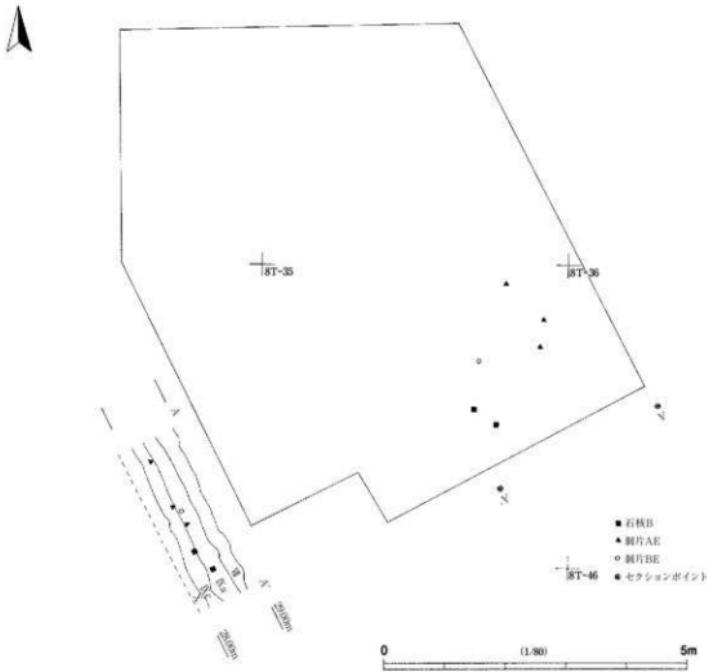


第9図 集中2・集中3・集中4の遺物

3 集中3

集中1の南側に接するIX層中部を産出層準とする小規模な集中である。遺物総数は5点であり、房総半島万田野・長浜層の礫が使われている。遺存する資料からは、石核Bからの小型剝片の限定的生産を背景として形成された集中である。

4は黒色安山岩製の石核Bである。礫面付きの剝片をブランクとし、小型剝片の剥離が開始された段



第10図 集中3遺物分布状況

階の石核である。

5は4と同一母岩の石核Bである。やや剥離は進歩し、小型の剥片が生産されている。6は剥片AEである。酸化フロントの発達する石材であるため、刃こぼれの観察が難しい。前記石核と同一母岩である。

7、8は同一母岩の剥片AEである。非常に小型の円盤を両極剥離によって分割剥離していることがわかる。

9はホルンフェルス製の剥片AEで、背面は縦面が覆う。7、8とまったく同じように円盤を分割剥離する状況が認められる。

第3表 集中3石器属性表

標図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
9	ST-25	22	剥片AE	ホルンフェルス	395	242	8.5	7.56
8	ST-25	23	剥片AE	黒色安山岩	153	296	21.2	8.80
7	ST-25	24	剥片AE	黒色安山岩	278	121	10.1	2.93
6	ST-25	25	剥片BE	黒色安山岩	233	131	4.9	1.22
4	ST-25	26	石核B	黒色安山岩	265	29.1	9.8	11.97
5	ST-25	27	石核B	黒色安山岩	233	28.8	13.2	7.47

4 集中4

珪化泥岩製の石刃（正確にはコンバージェント・フレイク）がIXc層から単独出土している。單剥離面の打面を残し、大きめの打瘤と裂痕を留めている。また、両側縁部には使用痕が明瞭に残されている。

第4表 集中4石器属性表

標図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
10	8T-23	2	石刃C	珪化泥岩 T	63.4	29.1	12.1	1327

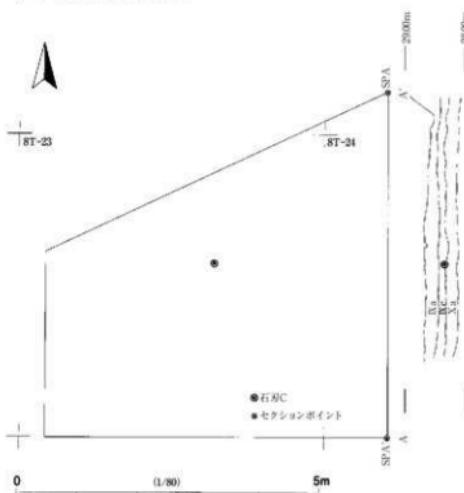
5 集中5

8T-25～8T-35を中心とした径4m×3mくらいの範囲内に、石刃2点、石核B2点、剝片33点、合計37点の石器が散布している。剝片類の内訳は、A類4点、AC類3点、AD類1点、B類8点、BC類8点、AD類9点であり、使用痕や加工痕の認められるものが17点、64%に達する。遺物の産出層準はVI層～VII層である。

接合資料は2点1組ある（1）。石核側面部を切り取る剝片が2点接合する。

2、3は石核Bである。2はチャートの裂片をプランクとするもの。3は厚手の珪質頁岩Yの剝片をプランクとし、縱長の小剝片が剥離されている。同一母岩の両極剝片は遺存していない。

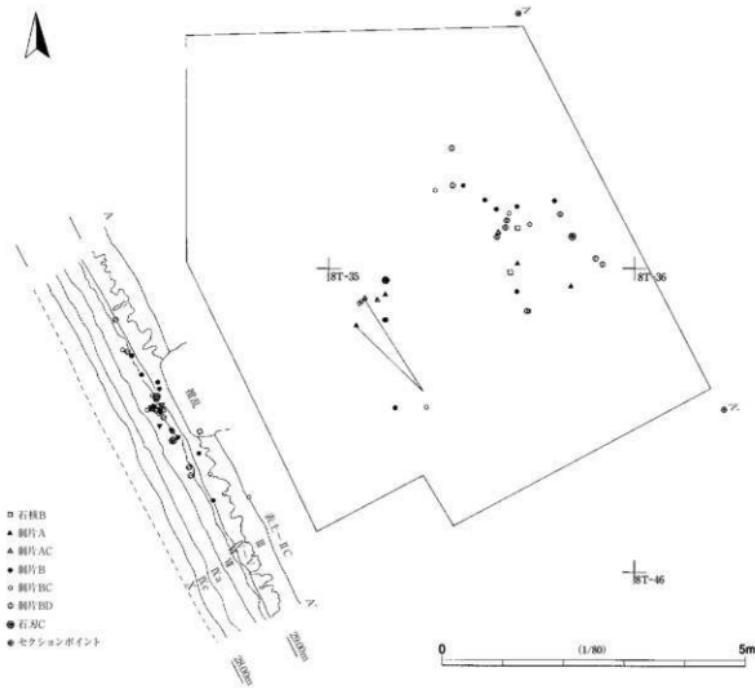
4、5は石刃とした。两者とも対向打面の石核から剥離されている。打面には細かい調整剥離が認められる。5は長さが短いことから、石刃用石核の消耗した段階の作出品とみられるが、幅の広い平面形から、二次棱線をつくるためのコントロール剝片である可能性もある（二次棱線、コントロール剝片の技術的意味は田村前掲論文参照）。



第11図 集中4遺物分布図

6は石刃生産に伴う一次棱線形成剝片である。明確な稜調整は認められない。使用痕付き剝片である9もコントロール剝片と分類しがちである。背面右側の剝離面の切り合いは稜形成のためとも解釈されるかもしれないが、プランクは小型不整形であり、一般的剝片の剥離痕である可能性も多い。この場合には打面のローテーションということになる。

7～16、24は使用痕と判断される刃こぼれのある剝片である。いずれも小型のプランクである。平均長20.4mm ($d = 6.47$)、平均幅19.4mm ($d = 8.08$)、平均厚5.6mm ($d = 2.00$) であり、細石器という評価が妥当である。これらの剝片が剥離された石核の実態を知りたいが、剥離過程をうかがうに足る資料に



第12図 集中5遺物分布図

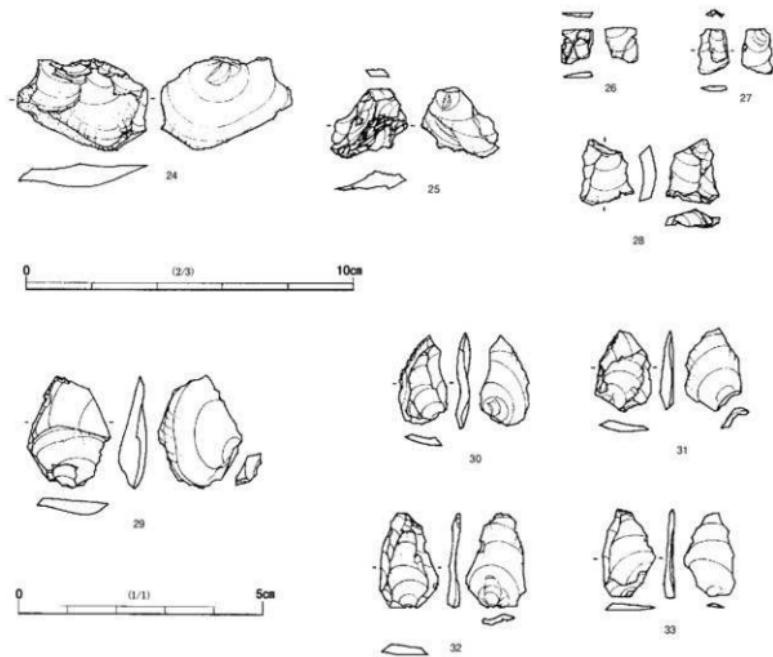
乏しい。ただし、複剥離打面と背面の交叉加撃軸によって、小刻みに打面ローテンションを反覆する工程が考えられることから、小型サイクロ状石核から剝離された可能性が高い。このサイクロ状石核は、石材の同一性から、当初は石刃用の石核、あるいは石刃そのものであったことも想定される。大型の石刃用石核のリダクション過程の終末段階で、このような細石器石器群が構成されることは大きな驚きである。

19～22、25～28は小型の剝片である。

23、29～33はニブリングによる調整が観察される剝片である。23は截断剝片の背面左側縁にニブリングが観察される。29～33は端部整形尖頭器と分類すべき剝片である。29は貝殻状の剝片を横に使い、側縁と底縁との交叉部が尖頭部を構成する。ニブリングは背面左側縁に観察される。30は加撃軸と石器長軸が交叉する剝片（斜軸マイクロ剝片）を素材とする。ニブリングによる整形は背面左側縁部に明瞭に認められる。31もこれと特徴を同じくする。32ではニブリングの形跡は側縁部には認められないにもかかわらず、尖頭部にはインパクト・ダメージ（投射具が対象に衝突した際に衝突部位に生じる桶状剝離や折れ）がつき、投射具チップとして機能していたことが想定される。33もこれと類似した石器で、インパクト・ダメージとはいえないが、微細な剝痕が尖頭部周辺に認められる。細部加工の有無が投射用尖頭器の基準となならないことは明白である。



第13図 集中5の遺物（1）

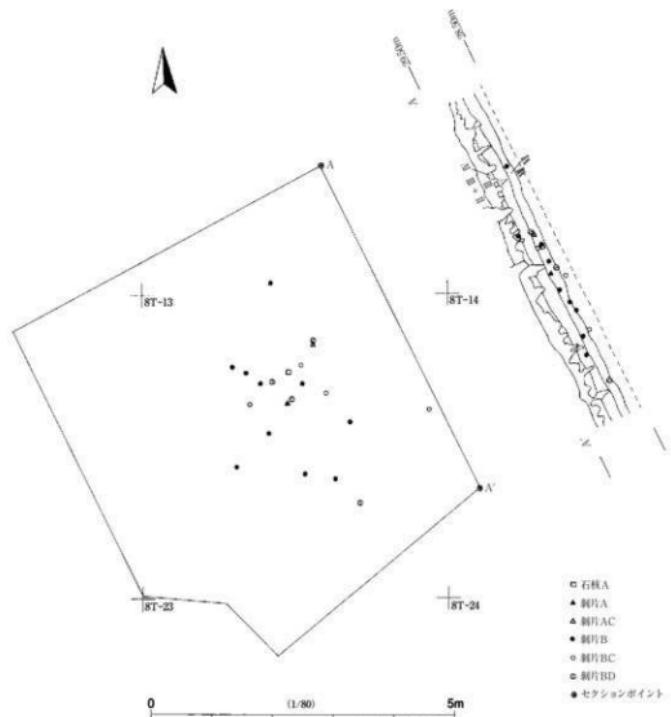


第14図 集中5の遺物（2）

D類剥片全体の平均長15.0mm($d = 3.06$)、平均幅14.0mm($d = 5.67$)、平均厚3.1mm($d = 1.27$)である。D類に含まれる端部加工尖頭器の平均長17.7mm($d = 2.97$)、平均幅13.2mm($d = 2.68$)、平均厚2.8mm($d = 0.73$)となっている。サンプル数が少なすぎて統計的な検定に耐えないが、長さがやや長く、薄手の剥片が選択されている可能性はある。

第5表 集中5石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
30	8T-25	1	剥片 AD	珪質頁岩 Y	15.4	13.6	2.6	0.21
24	8T-25	2	剥片 AC	珪質頁岩 Y	28.2	39.9	7.4	6.45
14	8T-25	3-1	剥片 BC	珪質頁岩 Y	14.8	23.6	6.6	1.36
19	8T-25	3-2	剥片 B	珪質頁岩 Y	13.0	10.2	1.9	4.10
21	8T-25	4	剥片 B	珪質頁岩 Y	17.6	17.9	4.1	0.80
3	8T-25	5	石核 B	珪質頁岩 Y	39.8	26.9	15.0	11.46
8	8T-25	6	剥片 BC	珪質頁岩 Y	29.7	19.5	7.3	3.05
27	8T-25	7	剥片 B	珪質頁岩 Y	14.9	9.7	2.1	0.16
32	8T-25	8	剥片 BD	珪質頁岩 Y	19.3	12.1	2.6	0.38
5	8T-25	9	石刃 C	珪質頁岩 Y	38.7	25.6	6.3	6.94
29	8T-25	10	剥片 BD	珪質頁岩 Y	17.5	21.9	3.9	1.14



第15図 集中6遺物分布図

15	8T-25	11	剥片 BD	珪質頁岩 Y	15.8	13.7	4.0	0.55
6	8T-25	12	剥片 A	珪質頁岩 Y	50.9	10.8	7.8	3.39
17	8T-25	13	剥片 BC	珪質頁岩 Y	11.9	10.4	3.3	0.26
13	8T-25	14	剥片 BD	珪質頁岩 Y	10.2	13.5	2.0	0.15
12	8T-25	15	剥片 BD	珪質頁岩 Y	16.2	25.9	5.5	1.43
18	8T-25	16	剥片 BC	珪質頁岩 Y	16.8	13.2	5.2	0.57
31	8T-25	17	剥片 BD	珪質頁岩 Y	14.6	12.2	2.9	0.29
26	8T-25	18	剥片 B	珪質頁岩 Y	9.3	9.8	1.8	0.11
7	8T-25	19	剥片 B	珪質頁岩 Y	11.4	14.3	4.5	0.71
33	8T-25	20	剥片 BD	珪質頁岩 Y	17.3	10.4	1.9	0.25
23	8T-25	21	剥片 BD	珪質頁岩 Y	10.1	8.7	3.9	0.22
	8T-25	22	剥片 A	珪質頁岩 Y	4.6	8.0	0.8	0.06
4	8T-35	2	石刃 C	珪質頁岩 Y	27.4	16.3	6.4	2.37
25	8T-35	3	剥片 B	珪質頁岩 Y	21.1	23.9	6.0	1.89
28	8T-35	4	剥片 A	珪質頁岩 Y	19.6	17.9	6.2	1.49
9	8T-35	5	剥片 AC	珪質頁岩 Y	26.9	17.8	6.8	3.44
11	8T-35	6	剥片 BC	珪質頁岩 Y	24.2	33.1	5.8	2.07
1a	8T-35	7	剥片 A	珪質頁岩 Y	23.9	12.6	6.7	1.52

20	8T-35	8	剥片 B	チャート	6.9	16.3	3.9	0.38
7	8T-35	9	剥片 BC	珪質頁岩 Y	14.8	17.4	4.6	0.66
10	8T-35	10-1	剥片 BC	珪質頁岩 Y	18.6	18.2	4.9	0.88
	8T-35	10-2	剥片 BD	珪質頁岩 Y	12.8	7.9	1.2	0.07
22	8T-35	11	剥片 B	珪質頁岩 Y	13.6	15.9	5.5	0.50
2	8T-35	12	石核 B	チャート	12.7	28.0	9.1	2.42
1b	8T-35	13	剥片 AC	珪質頁岩 Y	31.5	17.5	9.8	4.29
16	8T-35	14	剥片 BC	珪質頁岩 Y	14.1	18.0	4.6	0.46

6 集中6

4 m × 3 m くらいの範囲内に 21 点の石器が分布している。遺物產出層準は、遺物台帳記載ではⅦ層、近接する断面図投影ではⅥ層となっており、判断が難しい。Ⅵ層からⅦ層としておくが、集中5との新旧は決定できない。

21 点の石器の内訳は、石核 A が 1 点ある他はすべて剥片である。剥片の内訳は、A 類 1 点、AC 類 1 点、B 類 11 点、BC 類 4 点、BD 類 4 点であり、集中5と同様に使用痕や加工痕付きのものが多く、全剥片の 45% を占めている。

1 ~ 4 は剥片 D としたが、本報告の用語法では端部整形尖頭器であり、細石器と認定される。1 は長さ 11.8mm、幅 7.0mm、厚さ 0.17g という小型品で、斜軸マイクロ剥片側縁にニブリングを加え、基部をつくりだしている。2 も小型で、長さ 12.7mm、幅 5.1mm、厚さ 2.8mm である。素材の使い方は 1 と類似するが、ニブリングは基部と側縁の一部に観察される。3 はやや大きいが、それでも長さ 15.8mm、幅 7.0mm、厚さ 2.1mm である。素材は E 類剥片である可能性もある。破損している可能性もある。側縁部に僅かな剥離痕が認められる。注目すべきなのは、尖頭部で、マイクロ・インパクト・ダメージが明晰に残されていることである。これは実測図では表現できなかった。4 は最も大型で、長さ 16.5mm、幅 14.1mm、厚さ 3.5mm である。基部が抉れる凹基底型で、側縁、尖頭部、基部の一部などに断続的にニブリングによる整形剥離痕を留める。類例が袖ヶ浦市関畠遺跡第 30 ブロックにある（新田 2004）。

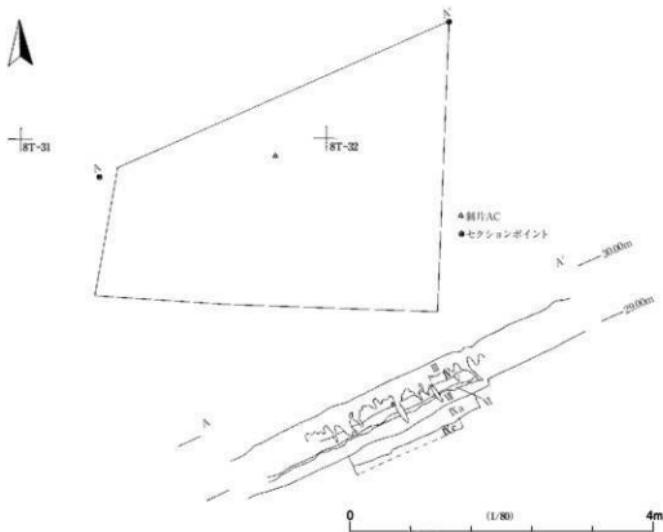
5 は黒曜石の厚みのある剥片を素材とする石核 A である。石刃モード B と呼ばれる、剥片や石刃を素材とする石核の側縁から小石刃を剥離する手法であり、後期旧石器時代初頭以来、汎世界的に認められ、後期旧石器時代タイプの石刃技法の特徴とされている（田村前掲論文）。この石核から剥離された小石刃は長さ 25mm、幅 6 mm 位であり、やや尾部の湾曲する形態になる。僅かにツイストしていたかもしれない。ツイストした小石刃は石刃モード B の特徴である。

6 ~ 9、11 の 5 点は使用痕と判断される刃こぼれのある剥片である。いずれも本集中の剥片としては大型の部類に属する。各資料に共通するのは、背面加撃軸が一方向にそろわない例が多いこと、複剥離打面をもつこと、形態的に齊一製を欠くことなどである。こうした特徴は集中5の剥片類に近く、やはりサイコロ状の石核から剥離された可能性が高い。

10、12 ~ 21 は剥片である。13 の碧玉製の剥片は線状打面、背面の潰れなど E 類剥片の特徴も認められるが、腹面は通常の剥離面であるところから、石核 B の制御用剥片であった可能性が高い。もともとの石核 B によっては小石刃の生産が難しくなったため、石核を斜めに分割するための加撃によるものだが、打角のコントロールが不充分で、端部がヒンジに終わっている。これ以外の剥片については、C 類剥片で指摘した通りである。



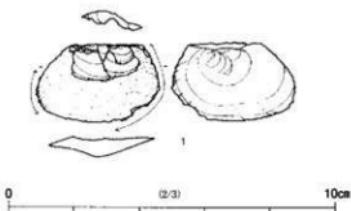
第16図 集中6の遺物



第17図 集中7遺物分布図

第6表 集中6石器属性表

採集番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
12	ST-13	1	剥片 B	黒色安山岩	17.8	19.9	2.1	0.65
3	ST-13	2	剥片 BD	黒曜石	15.8	7.0	3.9	0.30
8	ST-13	3	剥片 BC	珪質頁岩 Y	39.1	25.8	9.1	7.72
5	ST-13	4	石核 A	黒曜石	27.2	21.9	11.3	6.32
20	ST-13	5	剥片 B	黒曜石	8.1	9.9	2.5	0.15
19	ST-13	6	剥片 A	黒曜石	7.8	15.9	5.4	0.32
15	ST-13	7	剥片 B	黒曜石	27.8	19.1	11.2	3.47
21	ST-13	8	剥片 B	黒曜石	10.4	14.9	3.5	0.31
13	ST-13	9	剥片 B	珪質頁岩 Y	37.9	32.8	13.0	12.83
16	ST-13	10	剥片 B	碧玉	19.3	8.9	2.8	0.34
17	ST-13	11	剥片 B	碧玉	13.8	20.1	4.9	0.90
10	ST-13	12	剥片 B	碧玉	31.1	15.8	8.0	3.17
4	ST-13	13	剥片 BD	碧玉	16.5	14.1	3.5	0.50
18	ST-13	14	剥片 B	珪質頁岩 Y	11.8	13.7	3.0	0.33
9	ST-13	15	剥片 BC	珪質頁岩 Y	29.4	37.3	12.3	9.64
6	ST-13	16	剥片 AC	黒曜石	34.1	25.6	12.3	8.96
2	ST-13	17	剥片 BD	黒曜石	12.7	5.1	2.8	0.10
7	ST-13	19	剥片 BC	黒色安山岩	22.1	23.7	6.9	2.90
14	ST-13	20	剥片 B	珪質頁岩 Y	30.9	19.8	8.1	3.74
11	ST-13	21	剥片 BC	珪質頁岩 Y	28.1	24.2	4.9	2.57
1	ST-13	22	剥片 BD	黒曜石	11.8	7.0	3.2	0.17



第18図 集中7の遺物

7 集中7

珪化泥岩の剥片 AC が単独で出土している。産出層準はIV・V層層下部と記録されている。今回報告する集中としては、もっとも新しい時期に属する。

第7表 集中7石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
1	8T-31	2	剥片 AC	珪化泥岩 T	24.1	37.9	6.5	4.90

島立 桂 1994 「千原台ニュータウンVI－草刈六ノ台道路－」(財)千葉県文化財センター

田村 隆 2015 「まれびとの訪い－日本列島石刃石器群の成立－」『考古学研究』61-4, 24~44

新田浩三 2004 「東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財発掘調査報告書13 -袖ヶ浦市関畠道路-」(財)千葉県文化財センター

永塚俊司 2001 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XV -天神峰最上遺跡(空港No.64遺跡)-」(財)千葉県文化財センター

第3章 繩文時代の遺構と出土遺物

1 SK-001

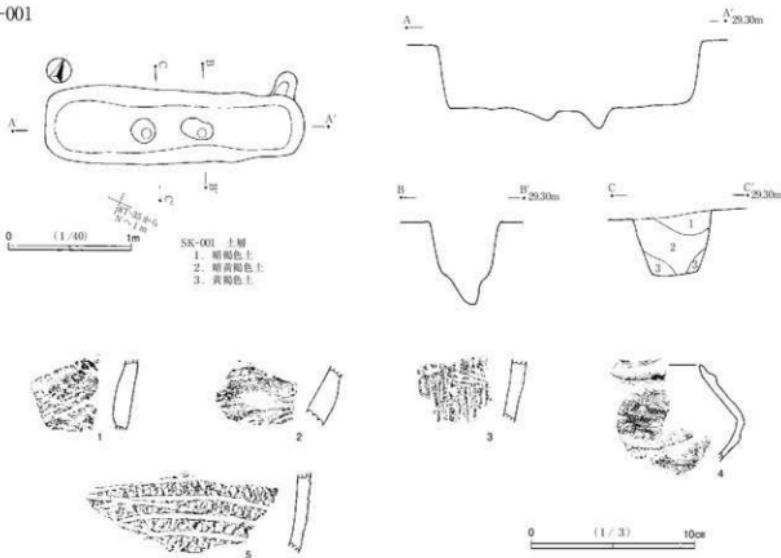
出口・鐘塚（3）遺跡の下層拡張調査段階で捕捉された。検出面はIV・V層であり、本来の掘り込み面は確認できない。長軸2.1m、短軸0.6mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.5mである。底面中央部に下部施設である小ピットがある。帰属時期不明の陥穴である。

2 繩文時代の遺物

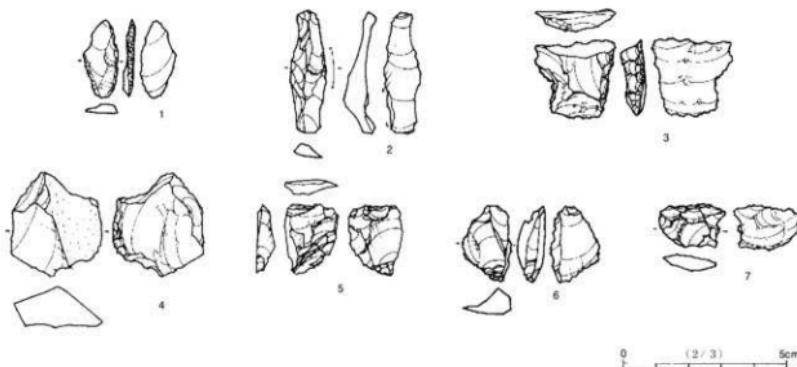
調査区からは少量の縄文土器と石器や蝶が出土した。遺物には後期旧石器時代の資料が含まれるが、混在したものか、再利用によるものか判断できないので本項で記載する。

縄文土器の内訳は、井草（大丸）式1点、田戸下層式1点、型式不詳早期後半条痕文土器4点、黒浜式8点、阿玉台式2点、堀之内式4点、加曾利B式3点、所属型式不明16点、合計39点である。いずれも細かい破片で、第19図にその一部を示した。1・2は早期後半の繊維土器で、貝殻条痕が付される。3は柔軟なもので表裏をなでられた土器で、多量の繊維を含み、スリップのある胎土の特徴から黒浜式と考えられる。4は堀之内式の注口土器であろう。器壁は薄く、堅敏な焼成で、器面は入念に磨かれている。5は加曾利B式の粗製土器である。

SK-001



第19図 繩文時代の遺構と縄文土器



第20図 縄文時代遺物包含層出土石器

石器は第20図に示す。1は保田層産珪質頁岩製の小型のナイフ形石器である。2はやはり保田層産珪質頁岩の剝片である。背面には各方向からの剥離面が交叉し、リッジを除去する制御用剝片の剥離に後続する工程で生産されたことが分かる。1、2は後期旧石器時代の遺物であるとみられる。3は黒曜石製の剝片に加工した削器である。器面の風化から、本例も後期旧石器時代の遺物とも判断できるが、断定はできない。4は砂岩製の石器断片である。5及び6は石核B（ビエス・エスキエ）である。5は中生代珪質頁岩、6はチャートを素材としている。7はチャート製の剝片である。

このほかに、礫の小破片が11点ある。調査区内に散在する状況である。石材は流紋岩質溶結凝灰岩が2点ある以外は、砂岩である。被熱による破片が多い。

第4章　まとめ

出口・鐘塚遺跡の主要部分は昭和61年度に発掘され、すでに報告書も刊行されている。

今回報告する出口・鐘塚（2）・（3）・（4）遺跡のエリアからは、後期旧石器時代の遺物集中か所が7か所、縄文時代の陥穴、近世の溝などが発見された。まとめとして、後期旧石器時代の石器群について触れておきたい。

集中1は、非常に狭い範囲に有溝砥石を含む6点の遺物が集中していた。有溝砥石に関しては、本文に詳しい観察結果を記述した。県内では、まず市原市草刈六之台遺跡で発見され（島立1994）、千葉市白鳥台遺跡の例が追加され（古内1984）、次いで成田市天神峰最上遺跡から海岸礫製の例が発見された（永塚2001）。石質や研磨面構成に共通性がある。

集中5及び集中6からはややまとまった量の石器が出土した。初めてこれらの石器群を見たときには、非常に小型の剝片が多くあり、かなり消耗した石核から剥離された剝片類であるという印象を受けた。特に、使われている石材が良質な黒曜石や、矢子層産珪質頁岩であることから、遠隔地から搬入された石材の最終的な消費形態であるように思われた。これらの石材は石刃素材として多く用いられていたという一般的な認識があり、細かな剝片が注意されることはなかったことも、こうした認識を誘導したのであった。

しかし、実態はそのようなものではなかった。集中5では、遺存した剝片17点の内半数以上の64%が道具として使われている。集中6でも20点の剝片の約半数45%は道具であった。しかも、道具として使われた剝片のサイズは非常に小さく、長さは20mm前後のものが多い。細部加工のある剝片の最小のものでは僅かに長さ11.8mm、幅7.0mmである。その調整技術もニブリングによるものが大半であり、こうした微小石器が日常的に使用されていたことは大きな驚きであった。さらに、微小インパクト・ダメージの確認によって、その一部が投射具の先端部チップである可能性も想定された。従来、このような微小石器（nanolithic）は断片的にしか認識されておらず、今回注意された意義は大きい。

このような微小石器のプランクはどのようなものであったのだろう。また、プランク生産はいかなる方法によって行われているのであろう。残念なことに、本遺跡では微小石器とそのプランクの生産過程を提示するための材料が不足している。本遺跡とほぼ同じ時代に形成された市原押沼第2遺跡第3文化層（田島2010）では、小型剝片を生産するために、4種類の方法が使われている。押沼第2遺跡第3文化層には多数の石刃が含まれるが、石刃にはさまざまな変異が確認され、それに対応する生産手法が想定されている（石材消費戦略については田村2013参照）。微小石器のプランク生産には4種ある。

- (1) 石刃生産技法Bによる小石刃及び制御用石刃を素材とする小石刃や剝片を素材とするもの。石刃生産技法Bとは、石刃を横に割って、割った面を打面として側縁から小石刃を生産するものである。これには制御用の厚みのある石刃や剝片が使われることが多くある。
- (2) 石核を製作する際に生じる剝片類を石核に転化するもの。特に、原石分割段階の礫面付き大型剝片が石核プランクに選択されることが多い。
- (3) 不整な角礫を剝片製プランク生産用の石核とするもの。図の2点は保田層産の珪質頁岩を素材とし、縦横にジョイント面が交錯するため、素材は不整なジョイント面を留めるブロックに分割される。このブロックが石核プランクとして使用される。

(4) 石核Bによる両極剥片を素材とするもの。東北アジアでは、石核Bは細石刃核として機能することが多く、わが国も例外とはいえない。

以上、4種のブランク生産が想定される。これ以外に、石刃生産に関わる消耗した石核やブロック状の石核片などをブランクにする場合が想定され、これを仮想類（5）としておく。本遺跡の微小石器の場合、良質な黒曜石や矢子層産珪質頁岩が素材となっていることから、(1) や (2) が該当する可能性がある。

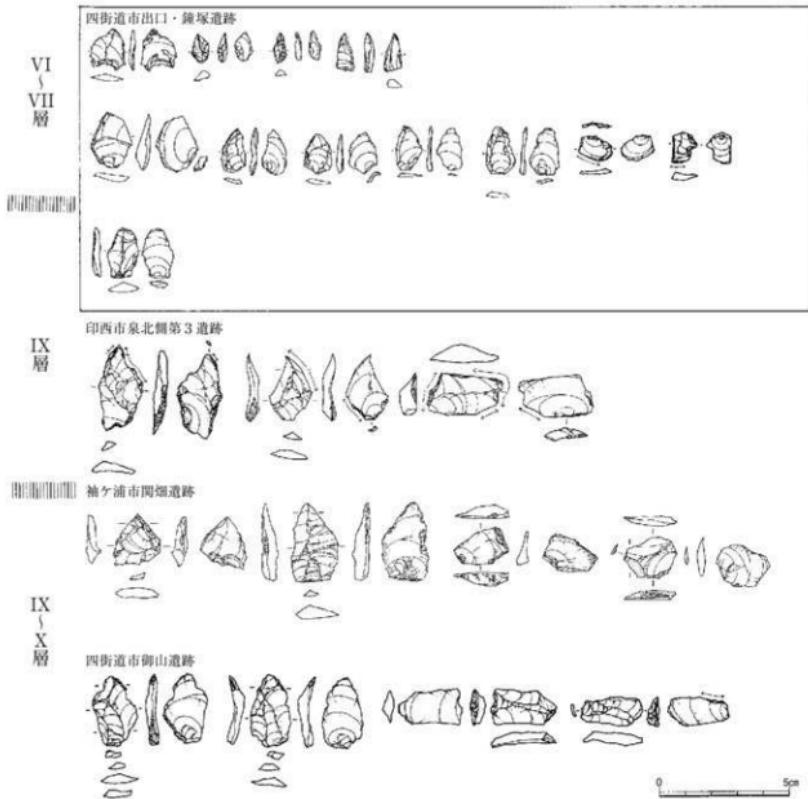
微小石器が作られ、使われた背景として、遠隔地石材の欠乏を想定されてきた。長距離移動に伴う石材補給に関する理論的なモデルによれば、石器石材の管理は、石材の運用面の方法（個別的な備給戦略）と、移動過程での特定地点での石材補充（場所的な備給戦略）によって支えられている。このモデルによれば、移動頻度が高く、かつ移動距離が長距離に傾くと、石器石材は移動集団によって拐帯され、逐次消費されることになる。このため、石器群は石器石材の運用のされ方に強く影響される。ここでは石器のリサイクルやリダクションが一般化する。これを客商家的な石材利用という。一方、居住地移動が一定のキャッシュメント・エリア内に収束する場合、石器石材にはエリア内の場所で採集される石材が卓越するようになり、石材消費は浪費家的になる。

ここで集中5と集中6に立ち返ってみよう。ここでは、石器群の大半が、きわめて遠隔地でしか採れない石材によって構成されている。集中5では脊梁山地を越えて、米沢盆地南縁部にまで採石行は及んでいる。集中6の黒曜石原産地は推定の域を出ないが、原石は、筑摩高地の、当時あっては森林限界にまで踏み込まれて入手できなかった。これらの原石の管理は、備給理論が推定するように、個別的な備給戦略に委ねられることになる。

微小石器群が形成された理由として、個別的な備給を想定することはあり得ることである。ところで、個別的な備給を可能にしたテクノロジーとはいがなるものであったのか。まず思い当たるのは、その小ささは明らかに着柄を前提としているということである。世界先史学では、着柄・植刃を前提とした微小石器を細石器（microlith）という（雨宮・上田 2000 この論文では細石器の通用性が的確に予測されている。なお、研究草創期の（芹沢 1956）では、①細石刃（矢出川）、②剥片製小型石器（曾根）、③幾何形細石器（井島）の三者を総括して、日本の microlith を定義している）。細石刃のみを細石器とみなす狭隘な立場は日本国内でしか通用しない。従って、以下、微小石器を世界的な基準に準拠して細石器と呼ぶことにしよう。少なくとも、集中5や集中6の時代には細石器化が促進されていた。それは個別的な備給戦略と関係していると考えられるが、その起源はどのように考えられるだろう。

今のところ、わが国でもっとも古い細石器石器群は、出口・鐘塚遺跡の東北1km弱のところにある御山遺跡第II文化層から出土している（矢本 1994）。石器群の産出層準は第2黒色帯とX層との境界付近、あるいはその直下とされ、後期旧石器時代前半期初頭に置かれる（時期区分は田村 2015）。ユーラシア西部上部旧石器時代の開始は細石器石器群の出現によって画されるといわれているが、わが国をはじめとする東アジアにおける後期旧石器時代の始まりも、剥片製細石器の出現と軌を一にしていることになる。後期旧石器時代の出現は、石刃技法ばかりではなく、細石器の組織的導入によっても定義される。

御山遺跡第II文化層の細石器に関しては、かつて端部整形石器という分類範疇を設定した。小型サイコロ状石核から得られる貝殻状剥片を素材とし、先細りの剥片から端部整形尖頭器が、長円形の剥片からは端部整形刃器が生産される。この時期の類例は、袖ヶ浦市閑畠遺跡第I文化層（新田 2004）にある。後続する第2黒色帯中部の例としては酒々井町墨古沢南I遺跡でいわゆる台形石器と共に伴する事例が報告さ



第21図 刺片製小型石器の系統

れている（新田 2005）。出口・鐘塚（1）遺跡にもある（岡田 1999）。また、この時期の石核 B（ビエス・エスキエ）への依存度の急激な高まりは、とりもなおさず小石刃様剝片の量産体制の確立を意味し、細石器群の定着・多様化の過程と理解することができる。

出口・鐘塚遺跡の細石器群は、墨古沢南遺跡例に後続するものであり、剥片製細石器といふ一系統に帰属する事例である可能性が高い（第21図）。この段階には、すでに石刃を斜断するトランケーションによるナイフ形石器が作られており、非常に複雑化した狩猟・加工技術体系が生活を支えていた。これに関しては、すでに弓矢猟とダーツによる投げ槍猟の併存を指摘したことがある。仮に、このような機能差が想定できるならば、先に触れた両極的な石材消費戦略とともに、狩猟対象や狩猟環境に対応した狩猟具の機能的な違いというシナリオも必要になる。いずれにせよ、今後の検討課題は膨大である。

引用・参考文献

- 雨宮瑞生・上田 耕 2000 「細石器としての南九州ナイフ形石器」『ミューゼアム知覧紀要』第6号 1～9頁
- 岡田誠造 1999 「四街道市出口・鐘塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書II－」(財)千葉県文化財センター
- 島立 桂 1994 「千原台ニュータウンIV－市原市草刈六之台遺跡－」(財)千葉県文化財センター
- 芹沢長介 1956 「日本に於ける無土器文化」『人類学雑誌』64-3 31-43頁
- 田島 新 2010 「千原台ニュータウンXX II－市原市押沼第2遺跡（下層）・川焼台遺跡（下層）－」(財)千葉県教育振興財團
- 田村 隆 2013 「総括」『谷津貝塚埋蔵文化財発掘調査報告書IV』国際文化財株式会社 181～191頁
- 田村 隆 2015 「まれびとの詠い－日本列島石刃石器群の成立－」『考古学研究』61-4、24～44頁
- 永塚俊司 2001 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XV－天神峰最上遺跡（空港No.64遺跡）－」(財)千葉県文化財センター
- 新田浩三 2004 「東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財発掘調査報告書13－袖ヶ浦市閔畠遺跡－」(財)千葉県文化財センター
- 新田浩三 2005 「東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財発掘調査報告書I－酒々井町墨古沢南I遺跡－」(財)千葉県文化財センター
- 古内 茂 1984 「千葉東南部ニュータウン15－馬の口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡－」(財)千葉県文化財センター
- 矢本節朗 1994 「四街道市御山遺跡（1）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書－」(財)千葉県文化財センター

写 真 図 版



集中 1 遺物出土狀況



集中 1 有溝砥石出土狀況（1）



集中 1 有溝砥石出土狀況（2）



集中 2 遺物出土狀況



集中 3・集中 5 遺物出土狀況



集中 6 遺物出土狀況

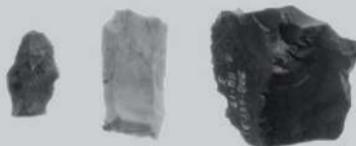


SK-001

後期旧石器時代集中 1



後期旧石器時代集中 2



後期旧石器時代集中 3

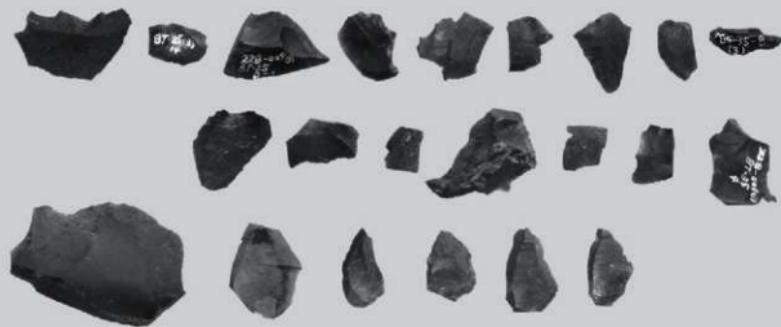


後期旧石器時代集中 4



後期旧石器時代集中 5





後期旧石器時代集中6



後期旧石器時代集中7 繩文時代遺物包含層



後期旧石器時代集中 1 有溝砥石



縄文土器



報告書抄録

ふりがな	よつかいどうしでぐちかねづか（2）・（3）・（4）いせき						
書名	四街道市出口・鐘塚（2）・（3）・（4）遺跡						
副書名	物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	XⅣ						
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告						
シリーズ番号	第743集						
編著者名	田村 隆						
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 809-2 TEL043-422-8811						
発行年月日	西暦 2015年 10月 27日						
ふりがな	ふりがな		コ ー ド		調査面積 m ²		
所取遺跡名	所 在 地		市町村	遺跡番号	北緯 東経		
出口・鐘塚 (2)・(3)・ (4)遺跡	千葉県四街道 市長岡字鐘塚		228		35度 41分 10秒		
	089		140度 11分 07秒	20090202～ 20100830	2,051m ²		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
出口・鐘塚 (2)・(3)・ (4)遺跡	包蔵地	旧石器時代	遺物集中地点 7か所		石器・砾		
	包蔵地	縄文時代	陥穴1基、遺物包含層1 か所		縄文土器、石器、砾		
要約	後期旧石器時代の大規模な遺物集中地点が発見された出口・鐘塚（1）遺跡の東側に所在する。後期旧石器時代の小規模な遺物集中地点が7か所発見された。そのうち1か所からは、砂岩製の有溝砥石が出土した。また、第2黒色帯上部の遺物集中地点からは、非常に小型の石器が複数出土し、その機能や編年的な位置付けに新たな知見を提供した。						

千葉県教育振興財団調査報告第 743 集

四街道市出口・鐘塚（2）・（3）・（4）遺跡

- 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 X Ⅷ -

平成 27 年 10 月 27 日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 独立行政法人 都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿 6-5-1

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の 2

印 刷 株式会社 エリート情報社[印刷出版局]
成田市東和田 415-10
